

## 第 3 章 地質調査

### 第3章 地質調査

#### 3.1 調査ボーリング

##### (1) 目的

現況埋立廃棄物の土質構成・地下水分布形態を把握し、原位置試験や地下水観測すること。

##### (2) ボーリング位置

今回のボーリングは、図 3.1.1 に示す位置に計 8 孔実施した。

##### (3) 内容

ボーリングは、以下の内容とした。

##### ① 堤内水位モニタリング孔

処分場内埋立廃棄物中の保有水位の観測孔⇒06B-1～06B-3 孔、計 3 孔。

##### ② 堤内水質深度別分析対象孔

水質分析を深度別を実施するための採水対象孔⇒06B-4～06B-8 孔、計 5 孔。

##### ③ 採取コアによる土壌分析⇒06B-8 孔、計 1 孔。

##### ④ 06B-8 孔をコア採取孔とするが、それ以外の孔もコア採取した。

##### ⑤ 採取コアは、深度別の採水試料に対応したコア試料とした。



①堤内水位モニタリング孔

06B-1～06B-3孔は、対象となる処分場の管理水面（廃棄物埋立深度）を考慮した深度とした。具体的には干満を考慮し、管理水位-2mを目安とし、ボーリング長は7mとした。

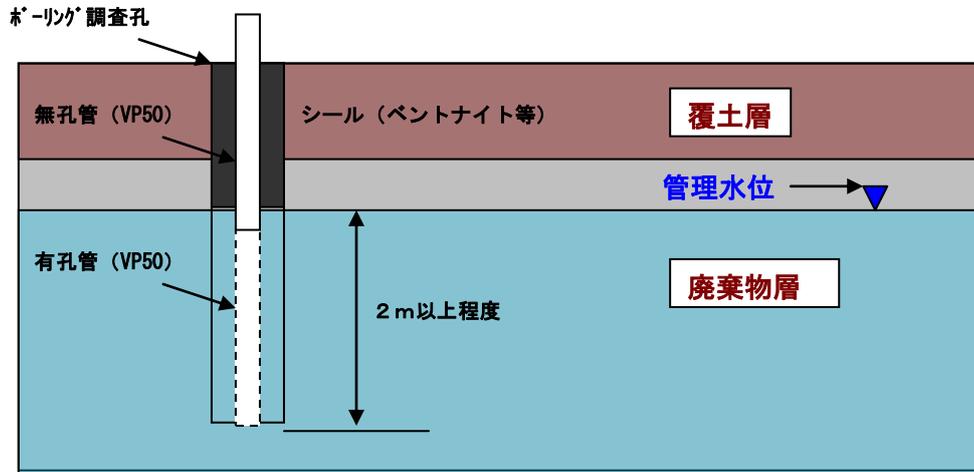


図 3.1.2 計画深度（掘削深度）の概説図

②堤内水質深度別分析対象孔

管理水面以深における保有水の水質モニタリングが行えるよう観測井戸を設置することとした。

<手法>

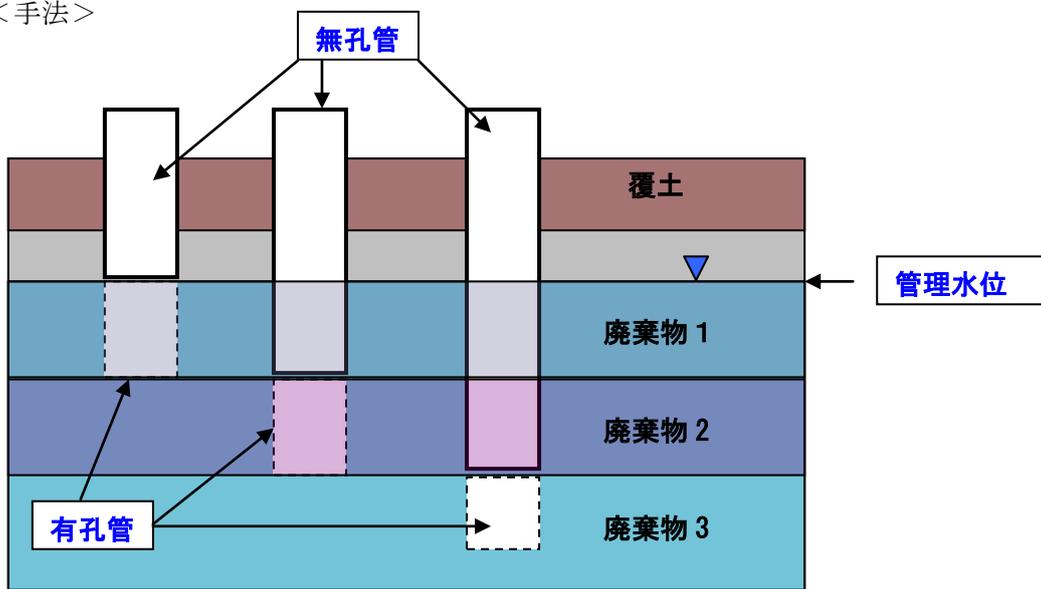


図 3.1.3 水質観測孔設置概念図

上記のように設置した水質観測孔にて2時期の水質観測を行うこととした。



#### (4) 方法

ボーリングは、 $\phi 86\text{mm}$  のオールコアボーリングとノンコアボーリングとした。

オールコアボーリングは 06B-8 孔を対象とし、コア採取率 100% を目標として実施した。

その他の孔は、ノンコアボーリングとしたが、可能な限りコアを採取した。

覆土、廃棄物および沖積層の軟弱ないしは軟質な地層に対しては、 $\phi 86\text{mm}$  メタルクラウンおよび同シングルコアチューブを使用して無水掘進とした。

なお、孔壁保護には、 $\phi 116\text{mm}$  のケーシングパイプを使用し、ベントナイト等の泥水循環材料は使用しない。

ボーリング状況は、作業状況(給圧、回転数等)、地層の種類、土質岩質、コア色、排水・逸水状況等を日々の日報に記録した。

ボーリングに使用する機械および資材は下表のとおりである。

表 3.1.2 使用機械資材一覧表

名称	型式	製作所	規格・能力	台数
ボーリングマシン	YS0-1H	(株)吉田鉄工所	3.7kw・掘進長 100m	2 台
給水ポンプ	NS50C	ヤンマー農機	3.7kw	2 台
ボーリングロッド		鉦研工業(株)	$\phi 40.5, 3.00\text{m}/\text{本}$	2 組
シングルコアチューブ		同上	$\phi 86, 1.00\text{m}/\text{本}$	2 本
ダブルコアチューブ		同上	$\phi 86, 2.00\text{m}/\text{本}$	2 本
メタルクラウン		同上	$\phi 86, \phi 116$	1 式
ダイアビット		同上	$\phi 86$	1 式
ケーシングパイプ		同上	$\phi 116, 1.00\text{m}/\text{本}$	1 式
標準貫入試験器		同上	モンケン, シュ, サンプラー	2 組
足場材料			単管パイプ, 足場板	2 組
給水ホース			$\phi 1\text{吋}$	1 式

(5) ボーリング完了基準

ボーリングは、埋立処分場内の廃棄物および基盤の沖積層を対象としている。

今回の調査目的は、廃棄物・沖積層の土質性状把握、地下水位観測、水質およびコア分析試料の採取が目的である。

地下水観測、深度別水質分析試料採水、コア分析試料採取を目的としたボーリングであるので、設計深度までのボーリング長に達した時点で完了とした。

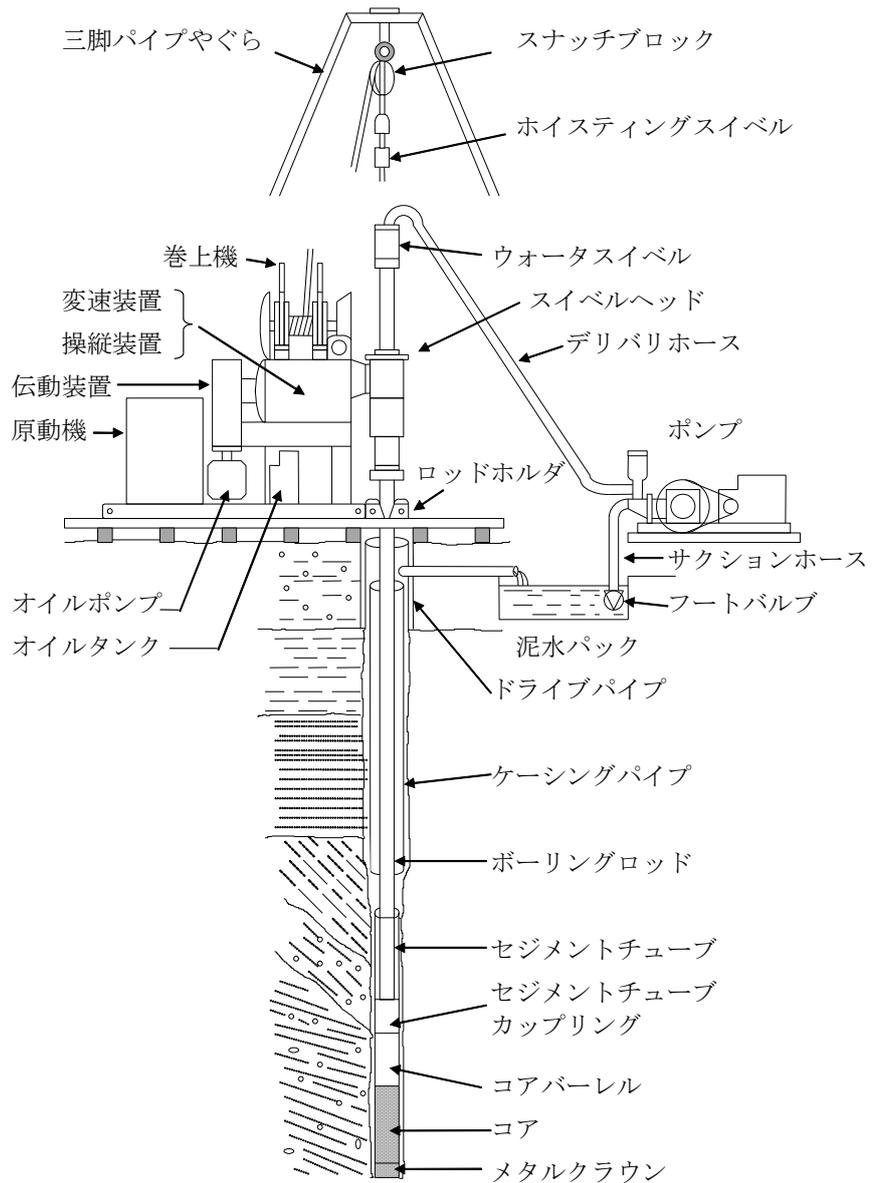


図 3.1.4 ボーリング装置概要図

(6) 結果

各ボーリング孔のコア観察結果に基づく地質状況は、巻末の地質柱状図および次頁以降に詳述する。

今回最深部までボーリングした 06B-8 孔のコア写真を下図に示す。

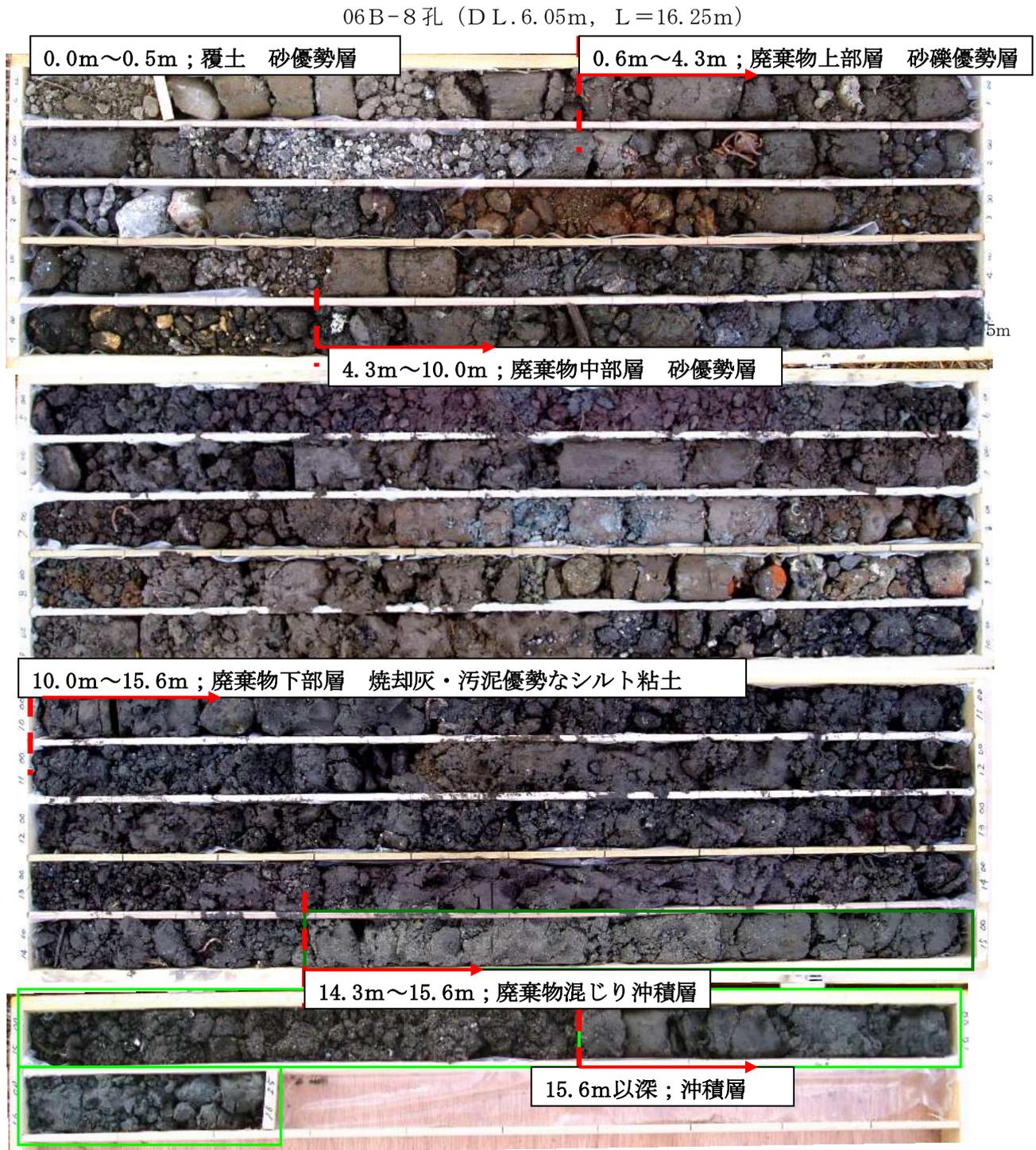


図 3.1.5 06B-8 孔コア写真

処分場基底面の沖積層は、06B-8孔位置では、深度14.3m付近から廃棄物の混在するシルト質砂層が分布し、15.6m以深は、廃棄物が存在しないことを確認した。

廃棄物層は、見かけ上、3層に区分できる。

①下部層 (Wa1)

深度10m以深に分布する砂質シルト～砂質粘土状の焼却灰・汚泥からなる細粒堆積物。暗紫灰～灰色を呈し、含水して軟弱である。臭気が強いことが特徴的である。

②中部層 (Wa2)

下部層に比べて砂分礫分が多くなり粗粒となる。金属片、ガラス片、プラスチック片等の廃棄物が多く含まれる。砂質土優勢である。

③上部層 (Wa3)

粘土混じり砂礫～礫質土優勢となる。中下部層に比べて礫率が大きく、褐色の色調を呈する箇所も確認される。

以下に今回のボーリング結果での層相区分表を示す。

地質区分		分布深度 (GL-m)	層厚 (m)	層相・特徴
覆土		0.0～0.6	0.6+	含む草根粘土混じり砂礫～礫質土
廃棄物	上部 Wa3	0.5～4.3	4.0～5.0	粘土混じり砂礫～礫混じり土 大礫を含む。コンクリート塊や栗石碎石 を多く含む。乾燥している。
	中部 Wa2	4.3～10.0	5.0～6.0	粘土混じり砂～礫混じり砂 ガラス片、金属片を多く含む砂質土状。
	下部 Wa1	10.0～14.3	4.0～5.0	砂質シルト～砂質粘土 焼却灰・汚泥優勢の細粒の廃棄物。 臭気強い。
沖積層 A1		14.3～15.6	1.0～1.5	沖積層と廃棄物の混在部 シルト質砂中に廃棄物が混在する。
		15.6～	2.0+	砂～シルト質砂 暗灰色の細粒堆積物

表 3.1.3 埋立地地盤層相区分表

06B-1孔 (L=7.25m)



- 0.00~1.00m  
暗緑灰色を呈する円礫混じりシルト質砂。  
草根混じる。
- 1.00~4.30m  
灰黒色を呈する礫混じり砂状。  
1.50~2.00m金属片(針金状) 入る。  
2.50~3.80mビニル、板状金属片多い。  
その他、プラ、瓦礫あり。
- 4.30~7.00m  
灰黒色を呈する細礫混じり砂状。  
5.70m付近金属片多い。  
含水シルーズ。  
5.90~6.00m付近、褐色シルトあり。

06B-2孔 (L=7.25m)



- 0.00~0.30m  
暗緑灰色を呈するシルト質砂。表土・覆土
- 0.30~4.30m  
灰黒~灰褐色を呈する礫混じり砂状。  
2.3~2.5m付近にガラス、プラ卓越。  
金属片が多く含まれる。  
2.8~3.0m間灰白色の流紋岩転石  
3.7m付近金属片多く入る。
- 4.30~7.00m  
暗灰黒色を呈する砂状。  
針状金属片、陶器片多い。  
4.8m付近に植物茎入る。  
6.6~6.8m間花崗岩礫。  
6.8~7.0m間コブ表面に褐色シルト附着。

06B-3孔 (L=7.25m)



- 0.00~0.50m  
暗緑灰色を呈するシルト質砂。  
径2~3cmの円礫混じる。礫外周は褐色風化。
- 0.50~4.80m  
灰黒色を呈する砂状。  
瓦礫、陶器片および金属片多い。  
2.50m以深は金属片卓越する。
- 4.80~5.10m  
褐色シルト混じり砂状。  
灰色の円礫混じる。
- 5.10~7.00m  
灰黒色を呈する砂状。  
含水シルーズ。

06B-4孔 (L=6.25m)



- 0.00~0.30m  
覆土  
暗緑灰色のシルト質砂状
- 0.30~2.80m  
灰黒色を呈する砂状。  
ガラス片、針金状金属片入る。
- 2.80~3.80m  
褐色帯びた粘土質砂状。  
礫塊少なくなる。
- 3.80~6.25m  
灰黒色を呈する砂状。  
金属片入る。  
5.9m付近に砂岩礫入る。

06B-5孔 (L=7.25m)



- 0.00~0.60m  
覆土。角礫、コンクリート破砕礫φ20mm前後が主体。  
中〜細砂、粘性土が混在。  
粘土混じり砂礫
- 0.60~4.50m  
焼却灰土層。  
全般に礫状の焼却灰が点在。コアは粘土質の砂状で水分量は低い。  
GL-1.8~2.1m間は硬く締まった状態（旧道路）。  
所々に小さな金属塊の混入が認められる。  
GL-3.5~3.8m間は礫状コア主体で鉄片が多く混在。  
礫混じり粘土質砂
- 4.50~5.00m  
粘土状のコア。  
砂質粘土  
GL-4.6~4.8m間はレンガ色状の粘土  
アルミ片混入、水分量が多い。
- 5.00~5.80m  
水分量大位。  
コアは粗砂及び粘性土混在状。  
臭気を伴う。  
礫混じり砂質シルト
- 5.80~7.25m  
水分量は多大で臭気強い。  
礫〜粗砂状焼却物が主体。  
全般に少量の粘性土状灰土が混じっている。  
礫混じりシルト混じり砂

06B-6孔 (L=8.25m)



- 0.00~0.50m 粘土混じり砂礫  
 覆土層。GL-0.3mまで表土。  
 角礫φ30mm前後を主とする。
- 0.50~1.00m 礫混じり粘土混じり砂  
 角礫φ20mm混入。砂状の焼却灰が主体。  
 少量のガラス片が混入。水分量小位。
- 1.00~1.70m 砂礫  
 ガラス細片・コンクリート破砕礫φ5mmが多量に混入。  
 若干、砕石φ10mm混入。水分量小位。
- 1.70~3.80m 礫混じり粘土質砂  
 粘性土状の焼却灰を多く含み、礫〜砂状の焼却灰を主とする。  
 φ10mm位の金属片が所々に点在。  
 陶器の細片、プラスチック類が混入。  
 臭気若干有り。
- 3.80~4.80m 礫混じり砂質粘土  
 粘性土状の焼却灰を主とする。  
 針金・陶器片・ビニール片が混入。  
 水分量は中位。
- 4.80~6.80m 礫混じり粘土質砂  
 細砂状の焼却灰土が主体で、礫状・粘性土状の焼却灰を多い。  
 鉄・アルミ片等の金属類、木片・ビニール片の塵類が混入。  
 水分量は中位。全般に臭気強い。
- 6.80~8.25m 礫混じりシルト混じり砂  
 φ2~30mmの角礫状及び粗砂状の焼却灰が主体。  
 シルト状の焼却灰も混在。  
 レンガ片・ビニール片等が混入。  
 水分量中〜小位。臭気は若干有り。

06B-7孔 (L=10.25m)



- 0.00~0.60m 粘土混じり砂礫  
 覆土層。GL-0.20m迄は草根混入の表土。  
 以下、角礫・砂・粘性土の混合土。
- 0.60~2.00m 礫混じり粘土質砂  
 粗砂状の焼却灰を主体に粘性土状の物も多く混じる。  
 礫状の金属片や焼却灰塊が混入。  
 GL-1.75~2.0m間は旧搬入道路の敷き材料と推される。  
 水分量は小位。
- 2.00~3.80m 礫混じり粘土混じり砂  
 細礫~砂状の焼却灰を主体に粘性土状が若干混在。  
 鉄片・ガラス片・ビニール片が混入。  
 全般に水分量は小位で、GL-3.0~3.5m間は水分量が多い。  
 GL-3.8m付近コンクリートの粉砕片が混入。
- 3.80~8.90m 粘土混じり砂礫  
 角礫やコンクリート破砕礫が主体。  
 粗砂状~粘性土状の焼却灰も混じる。  
 GL-5.75mより赤色の粘性土状。  
 GL-6.0~6.5m間水分量多く、その他は中位程度。  
 全体に所々ガラスや陶器片が混入し、金属片の混入も多い。  
 GL-8.5mからは木片・レンガ片混入。
- 8.90~10.25m 砂質粘土  
 粘性土状の焼却灰土層。  
 GL-9.0~10m間水分量は大位。  
 鉄片、陶器片等が混入。  
 臭気強い。

06B-8孔 (L = 16.25m)

0.0



5.0

10.0

15.0

16.0

5.0

10.0

15.0

- 0.00~0.40m  
暗緑灰色を呈するシルト質砂。  
草根混じり、碎石含む。
- 0.40~2.30m  
灰黒色を呈する礫混じり砂。  
径3~5cmの花崗岩礫、アスファルト塊含む。  
鉄線、金属片、ガラス片多い。乾燥状態。
- 2.30~3.50m  
褐色の粘土混じり灰黒色を呈する砂。  
2.30~2.70m間は褐色の礫混じり砂。
- 3.50~5.20m  
灰黒~青灰黒色礫混じり砂。  
砂~シルト状の焼却灰優勢となる。  
褐色の花崗岩礫入る。4.6m付近に木根混入
- 5.20~5.90m  
暗紫灰色の細砂状の灰優勢。含水し金属片多くなる。
- 5.90~9.60m  
灰黒~暗褐色の砂状。  
含水シコア表面はマッドケーキ付着。  
金属片やや多い。
- 7.5~7.7m間高炉セメント様の塊。  
8.7~9.0m間赤褐色の煉瓦混入する。
- 9.60~14.30m  
暗灰黒色を呈する礫混じり砂状。  
金属片入る。釘、番線様。  
含水するが細粒分少ない。
- 14.30~15.60m  
灰黒~緑灰色を呈するシルト質砂状。  
廃棄物と基礎地盤混合した漸移帯。  
硫化水素臭強い。金属片の他にガラス細片入る。
- 15.60~16.25m  
淡緑灰色のシルト混じり砂。  
軟質な砂層である。淘汰度は良好。  
指圧にて容易に変形する。

### 3.2 標準貫入試験

本試験は、各ボーリング孔において、廃棄物の硬軟・締り具合を評価するために実施した。試験は、JIS A 1219 に準拠し、各孔で深度 1 m 毎に実施した。

なお、今回は、06B-8 孔以外の水位水質観測孔の計 7 箇所（孔）で実施することとした。

#### (1) 試験方法

試験は、重さ 63.5kgf の重錘を高さ 75cm から自由落下させて標準貫入試験器先端のシユウを 30cm 貫入させるに要する打撃回数を測るものである。

試験区間は、予備打ち 15cm、本試験打ち 30cm そして後打ち 5 cm の計 50cm である。

中硬岩（軟岩Ⅱ）以上では実施しない。

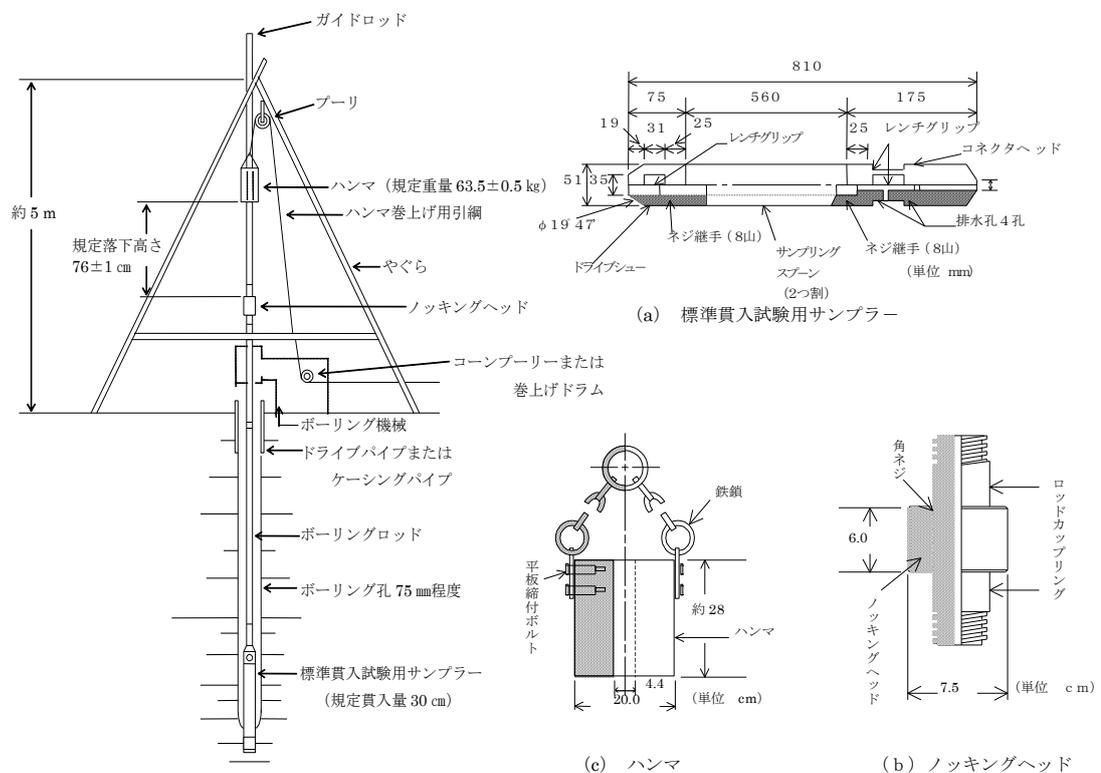


図 3.2.1 標準貫入試験機器概要図

(2) 標準貫入試験結果の整理

N値は、対象地質の“硬軟”，“締り具合”や相対密度等の判定指標として設計に反映させる。

結果は、地質柱状図に変化曲線として地質柱状図に併記する。

試験結果から判明する事項と推定できる内容は非常に豊富であるが、粘性土地盤と砂質地盤にわけて整理すると次表のようにまとめられる。

表 3.2.1 N値からの判断・推定事項一覧表

区 分	判 定 推 定 事 項	
調査結果一覧表 から 判定できる事項	構成土質と地下水位（土質柱状図） 深さ方向の強度変化（N値のグラフ） 軟弱層（N>4）の層厚 — 圧密試験の要否判定 軟弱層の排水条件 — 砂層、礫層の配列 基盤あるいは支持層（N>30）の位置	
N値から直接推定 または 計算できる事項	粘 土 性 地 盤	コンシステンシー（硬軟の程度） 一軸圧縮強さ（qu）または粘着力（C）の範囲 破壊に対する許容支持力（qa）の概算
	砂 質 地 盤	相対密度（締り具合の程度） 内部摩擦角（φ）の範囲 破壊に対する許容支持力（qa：φに基づく計算） 沈下に対する許容支持力（qa）の概算

以上の諸結果により判断して、今後の精密調査の要否、方法などを決めることができる。

なお、砂地盤の締り具合、粘土地盤のコンシステンシーについてはさらに次頁のように整理される。

① 砂質地盤

N値と砂地盤の締り具合および砂の内部摩擦角との関係は次のようになる。

表 3.2.2 砂の相対密度、内部摩擦角とN値との関係 (Peck, Meyerhef による)

N 値	相対密度(relative density)Dr=		内部摩擦角 φ (度)	
			ペックによる	マイヤーホフによる
0～ 4	非常に緩い(veryloose)	0.0～0.2	28.5 以下	30 以下
4～10	緩い(loose)	0.2～0.4	28.5～30	30～35
10～30	中位の(medium)	0.4～0.6	30～36	35～40
30～50	密な(dense)	0.6～0.8	36～41	40～45
50 以上	非常に密な(verydense)	0.8～1.0	41 以上	45 以上

「地盤調査法」 (地盤工学会)

また、砂質地盤の内部摩擦角 φ の推定には次式等が一般的に用いられている。

$$\phi = \sqrt{20N} + (15 \sim 20) \quad (\text{ダナムの式})$$

$$\phi = \sqrt{15N} + 15 \quad (\text{大崎の式})$$

$$\phi = 4.8 \log N + 21, (N > 5) \quad (\text{道路橋示方書の式})$$

② 粘性土地盤

N値から粘性土地盤の硬軟を判定することができるが、その場合には概ね次頁の表にまとめられる。また、粘性土の場合には支持力に関するものとして一軸圧縮強度 (qu) という強さを表す値があるが、それとN値にも下表のような相関がある。

表 3.2.3 粘土のコンシステンシー、一軸圧縮強さとN値との相関表 (Terzaghi)

コンシステンシー	非常に軟らかい	軟らかい	中位の	硬い	非常に硬い	固結した
N値	2 以下	2～4	4～8	8～15	15～30	30 以上
qu (kN/m <sup>2</sup> ) {kgf/cm <sup>2</sup> }	25 以下 {0.25 以下}	25～50 {0.2～0.50}	50～100 {0.5～1.0}	100～200 {1.0～2.0}	200～400 {2.0～4.0}	400 以上 (4.0 以上)

「地盤調査法」 (地盤工学会)

粘性土地盤の粘着力 (C) の推定には、次式が一般的に用いられている。

$$C = (0.6 \sim 1.0) N = 0.8 N \text{ tf/m}^2 = 7.84 N \text{ kN/m}^2$$

以上のように、土塊強度としてN値は、力学定数の参考値として解析資料とする。

### ③ 結果

砂礫状の破砕片が主体で、全区間で試験が成立した。マトリックスは軟質である。  
以下に試験結果を示す。

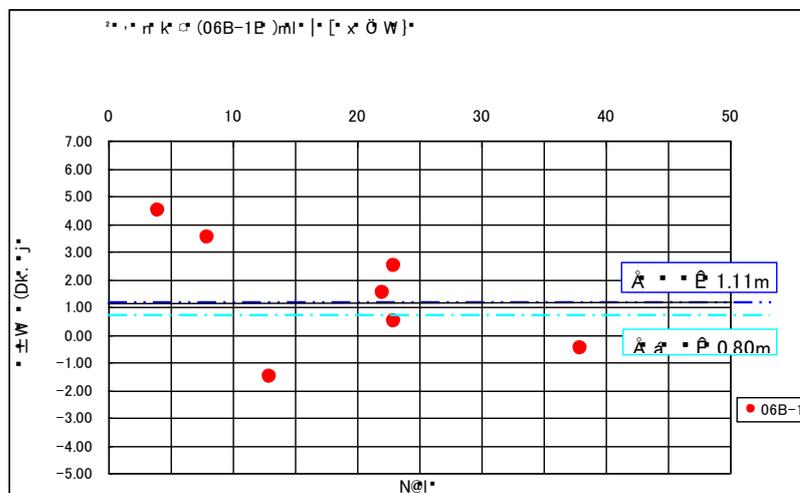
#### i) 調査地北側

06B-1 孔位置である。

右図上の図に結果を示す。

N値は深度とともに大きくなる傾向がある。

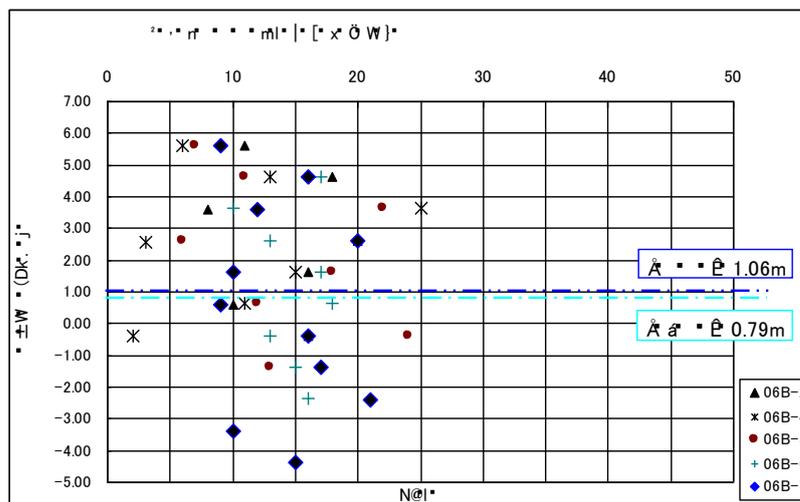
深度3m付近まで $N < 10$ 、それ以深は $10 < N$ となる。



#### ii) 調査地中央部

06B-2と06B-4~7孔位置である。

深度標高±0mの管理水面付近を境に浅部では、N値の分散が大きく、 $5 < N < 20$ 、±0m以深では、深度とともにN値も増加傾向が認められる。



#### iii) 調査地南側

06B-3 孔位置である。

深度とともにN値は増加傾向にある。

±0mまでの浅部では、 $5 < N < 15$ に、以深は、 $20 \leq N$ となっている。

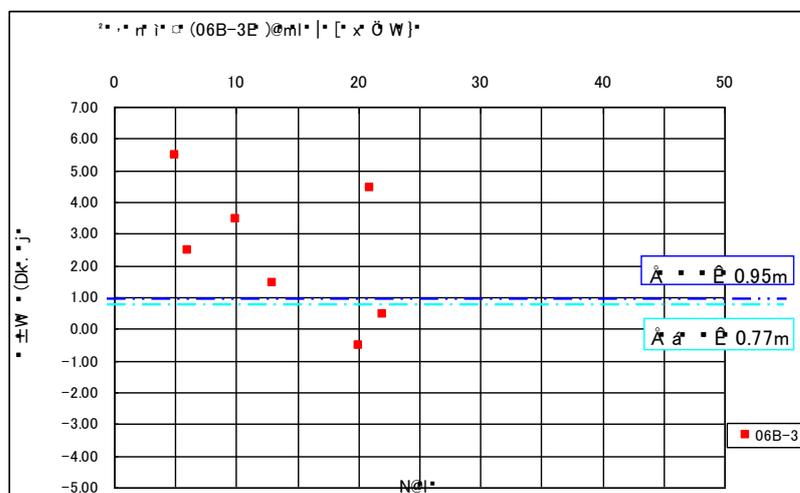


図 3.2.3 N値-深度標高関係図

表 3.2.4

W · N r · ± · E e · ¥

E Ô ·	±æ Ô [ x i · j	10cm · Ĩ · Ā · ĩ ·			Ā · ĩ ·	Nl	æ Ô ĩ Ĵ y Ĵ æ a
		0 · 10	10 · 20	20 · 30			
06B-1	0.15 ~ 0.45	1	1	2	4	4	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	4	2	2	8	8	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	8	8	7	23	23	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.45	7	7	8	22	22	p' t' ü Wa
10		10	10	30			
4.15 ~ 4.45	5	8	10	23	23	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
5.15 ~ 5.45	9	14	15	38	38	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
6.15 ~ 6.45	3	4	6	13	13	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
06B-2	0.15 ~ 0.45	3	4	4	11	11	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	5	8	5	18	18	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	3	2	3	8	8	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.45	7	5	8	20	20	p' t' ü Wa
10		10	10	30			
4.15 ~ 4.45	5	5	6	16	16	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
5.15 ~ 5.45	4	3	3	10	10	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
6.15 ~ 6.45	5	6	5	16	16	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
06B-3	0.15 ~ 0.45	1	2	2	5	5	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	7	7	7	21	21	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	4	3	3	10	10	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.45	2	2	2	6	6	p' t' ü Wa
10		10	10	30			
4.15 ~ 4.45	4	4	5	13	13	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
5.15 ~ 5.45	9	7	6	22	22	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
6.15 ~ 6.45	6	7	7	20	20	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
06B-4	0.15 ~ 0.45	1	3	2	6	6	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	4	6	3	13	13	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	11	8	6	25	25	p' t' ü Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.50	1	1	1	3	3	p' t' ü Wa
10		15	10	35			
4.15 ~ 4.45	6	6	3	15	15	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
5.15 ~ 5.45	3	5	3	11	11	p' t' ü Wa	
	10	10	10	30			
6.15 ~ 6.45	1	1	0	2	2	p' t' ü Wa	
	12	18	0	30			

表 3.2.5

W · N t · ± · E e · Y

E O ·	± a O [ x i · j	10cm · P · A · n ·			N t E (cm)	Nl	a O r z y z a a
		O · 10	10 · 20	20 · 30			
06B-5	0.15 ~ 0.45	1	3	3	7	7	p t Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	3	4	4	11	11	p t Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	9	8	5	22	22	p t Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.45	1	2	3	6	6	p t Wa
		10	10	10	30		
	4.15 ~ 4.45	7	5	6	18	18	p t Wa
		10	10	10	30		
	5.15 ~ 5.45	6	3	3	12	12	p t Wa
		10	10	10	30		
	6.15 ~ 6.45	9	8	7	24	24	p t Wa
		10	10	10	30		
7.15 ~ 7.45	5	4	4	13	13	p t Wa	
	10	10	10	30			
06B-6	0.15 ~ 0.45	3	3	3	9	9	p t Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	4	5	8	17	17	p t Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	2	4	4	10	10	p t Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.45	4	5	4	13	13	p t Wa
		10	10	10	30		
	4.15 ~ 4.45	5	6	6	17	17	p t Wa
		10	10	10	30		
	5.15 ~ 5.45	6	5	7	18	18	p t Wa
		10	10	10	30		
	6.15 ~ 6.45	4	4	5	13	13	p t Wa
		10	10	10	30		
7.15 ~ 7.45	4	5	6	15	15	p t Wa	
	10	10	10	30			
8.15 ~ 8.45	5	5	6	16	16	p t Wa	
	10	10	10	30			
06B-7	0.15 ~ 0.45	4	2	3	9	9	p t Wa
		10	10	10	30		
	1.15 ~ 1.45	6	6	4	16	16	p t Wa
		10	10	10	30		
	2.15 ~ 2.45	5	4	3	12	12	p t Wa
		10	10	10	30		
	3.15 ~ 3.45	6	8	6	20	20	p t Wa
		10	10	10	30		
	4.15 ~ 4.45	4	2	4	10	10	p t Wa
		10	10	10	30		
	5.15 ~ 5.45	2	4	3	9	9	p t Wa
		10	10	10	30		
	6.15 ~ 6.45	5	7	4	16	16	p t Wa
		10	10	10	30		
7.15 ~ 7.45	6	6	5	17	17	p t Wa	
	10	10	10	30			
8.15 ~ 8.45	7	8	6	21	21	p t Wa	
	10	10	10	30			
9.15 ~ 9.45	3	5	2	10	10	p t Wa	
	10	10	10	30			
10.15 ~ 10.45	4	7	4	15	15	p t Wa	
	10	10	10	30			

### 3.3 地盤構造(地盤断面図モデル)

埋立て廃棄物および廃棄物基底面以下に分布する沖積層を 06B-8 孔によるボーリングで確認した。

地盤構造を図 3.3.1 の横断面図に示す。

基底面以下の沖積層は、DL-10m付近に上面境界が分布し、ほぼフラットな境界面となっていると推定される。

廃棄物は、層相から、下部、中部と上部に大きく3区分できる可能性がある。

廃棄物は、人工的に埋立てられており、区分した各部層の連続性については、今後の詳細な検討が必要と判断される。

廃棄物層中の保有水等(地下水)は、ほぼDL+0.0~1.0m付近で安定しており、急激な水位変動は確認されなかった。

図 3.3.1 地盤横断面図

